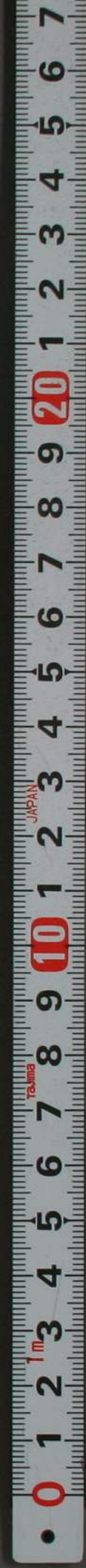


重修真書太閤記

上編

二

~13  
459  
102





門 459  
卷 102

消  
福  
赤

重修直書大閤記十一編卷之四

八丈嶋由來の事

并村田久兵衛物語乃事

北條早雲氏綱氏康氏政四代相續して百餘年關八  
箇國伊豆駿河を領し去りハ威風の至らぬ處ハ  
中ノ南海を隔て八丈といハ嶋あり此  
嶋ハ伊豆の地より伊勢に近しとおそるなり其故  
ハ空静なる時此嶋より見こみ以て西に當りて  
雲たむびく山あり或ハ伊豆へ乘らんとして誤て  
鳥羽熊野へ漂着し其處より又嶋へ乘歸るおとら

同  
會  
印

大開已二編卷之四



阿比のなる、此嶋周十里十三町十間二尺南北七里  
餘東西三里餘伊豆國下田より己の方み當り海上  
六十四里むうへ沖の嶋といひ、由百練抄み見  
えり、箭竹嶋女護嶋女國女人國と云、春夏秋ハ  
あはれと冬ハあ、とかや鎮西八郎為朝此嶋に渡  
り嶋の長者の婿として男子を産しむ島冠者為頼  
同次郎為家かと云、人みや西山の麓に館作り  
て住むひいとあり、永万元年乙亥三月鬼界嶋にお  
しわたり、其嶋みくも長たる者の婿とあり、あくれ  
の仁安元年丙戌男子を産むこれ琉球の舜天王原  
尊毅と申、これあり、為朝ハよく八丈に歸り安元

三年三月六日戦死あり、今西山の麓に入道  
宮と云、是ありとかや、為朝より五代相續して嶋の  
長たり、か六代の孫雲加入道といひ、時、當り  
康正二年十月十四日左衛門太郎に降参し、僧とか  
又端翁宗的と云といひ、是ハ金川宗麟嶋をとり  
左衛門太郎を渡す、その子奥山八郎五郎宗圓と云  
三十餘年嶋の代官たり、朝比奈に渡り、是より  
伊豆の嶋とあり、北條の持と、東壁錦封龍泉美記  
と云、印を絹へ捺す、かや、と嶋の舊家奥山某、  
家記み見ゆるとかや、但嶋の宗福寺の舊記、ハ金  
川宗麟と同時、渡り人、即宗福寺に開基し、龍峯山



宗福寺といひ又ハ香爐山弥陀寺といひ云永享十二年金川宗興寺を請く住持といひ端翁宗的ありといひハ康正二年ハ僧とあり一人ありハまゝ宗福寺過去帳ハ宗的信士天正元年七月三日とある人みやといひハ康正二年より百八十年後ハ別人なるハハ或ハ康正二年と云り誤ハ端翁宗的より二世三世四世ハ詳ならずハ五世を用順和尚と云天文五年より十年住持とありハ六世養真淳浮跡和尚天文十五年入寺この時より妻帯とあり十二年住持と七世靈誓宗游永禄元年入寺この時ハ浄土宗と改めるといハ又嶋の舊家菊池氏の間基

せハ長樂寺ハ舊岡の里の大善寺なり大善寺過去帳ハ住持明誓勢遍ハ觀應元年十月朔遷化といひハ次ハ清誓源榮といひハ至徳三年二月十三日といハ次ハ靈誓宗開といひハ明人ありとハハ應永廿一年七月十五日とありハ文歸真林氏朝章大公壽位といハ正中ハ六親眷屬有縁無縁三界万靈と記しハ其の次ハ同陽氏先親大婦靈位とありハ其裏ハ明德三年壬申十一月初四日漂流惡風受難來到嶋卅一人同四日夜即死畢同年餓飢病四十五人死畢以上三百七人と記しハ明德四年ハ明の洪武廿六年形りハ此寺ハ此地藏大菩薩昔金川宗麟と申人當嶋子至



申されし此内の書付子此地藏於破滅者八丈嶋可  
断滅といふ書付有之然る中代及破滅百有餘年菊  
池采女義武二人為父母并現世安穩後生善所之為  
再建此外當所之檀那衆寄合毎年夏秋廿四日子祭  
尊むべきなり仍為未代書付畢寛永十一年二月  
持主菊池采女義武筆取宇喜多秀家作者佐久良勝  
大夫と有り寛永十一年より百有餘年といへとも  
享祿天文の間をいふ然れとも奥山大和と崇祀る  
寶明神唐銅神体の銘に天長地久國土安穩宗興寺  
御慎于末代可有鎮護永享十一年巳未卯月廿日宗  
麟判とあれし宗麟ハ永享中の人なるに疑ひあり

康正二年より十七年までは八丈嶋を取て奥山左  
衛門太郎を代官とせしあるへし然るに文明十八  
年八郎五郎國へ出る嫡子新五郎子嶋を渡し候る  
難風よあふと云記あり左衛門太郎八郎五郎と  
改めし又ハ左衛門太郎の子を尋へし此新五郎  
明應六年まで十二年の間代官たりし明應六年  
の條に夏天氣よし世上富貴なり九月九日大風此  
時代官奥山新五郎國入り候ひ十月廿六日死を七  
年奥山八郎五郎代官に渡り年貢神奈川へ納る八  
月十三日新嶋入り難風長戸路七郎左衛門代官に  
渡るとあり嶋の役人長戸路系圖に長戸路七郎



左衛門真敷の田原藤太秀郷の後胤なり。明應七年  
 早雲代官となり。廿五人あり。渡る。同八年歸國。永正  
 六年まゝ勤めたり。同七年子息真隆繼て代官とあり  
 同十一年奥山八郎五郎忠茂北條の代官とあり  
 とあり。然しは神奈川と北條と二方あり。永正十年  
 まゝ領を十一人あり。全く北條の領とあり  
 同十二年四月十八日奥山八郎次郎忠  
 督をよひ三浦介義同代官三浦弥三郎利重新嶋へ  
 着十九日合戦。真隆戦死とあり。まゝ長戸路。舊  
 記。永正元年閏二月十日。雪降。幾年あり。かゝりて  
 て人々不思議かり。とかや。同三年四月七日。長戸

路渡海。その種を乞得て五月十五日。不歸嶋せ  
 同七年。此年代官八郎次郎の嶋三郷。小嶋  
 中の郷の弥三郎青ヶ嶋の太郎三郎とあり。同九年  
 嶋の代官左衛門次郎の下の田へ渡り。嶋の  
 ことを訴へけり。早雲入道の氣違ひ。かは下田  
 を去り。行衛のゆゑ。因て朝比奈藤兵衛と云ふのや  
 代官とあり。同五月廿八日。嶋へ着藤兵衛  
 一。嶋中用心のため鎗を打て。牛の皮。不。具  
 足をあり。二艘作。か。敵寄。來。ら。い  
 同十一年。二艘の船。不。國へ出。敵方より。十三艘  
 不。追。か。く。去。と。二艘。三浦へ着。導。守。へ。年。貢。を

大隈言一系考四



上る。當嶋の代官大嶋へ乗とちり。早雲の代官駿河  
 圓明とりの。老大将二百許の勢ふ。夜討に寄る取  
 あえは落て。三浦へ行。八郎次郎弟八郎五郎小嶋の  
 三郎次郎大嶋ふ。生捕と。早雲方へへ見参ふ入。八  
 郎五郎嶋の代官請取圓明の方より下知として太  
 郎次郎八郎五郎十月十日嶋へ入。八郎次郎ハ三浦  
 ふあり嶋を如元八郎五郎太郎次郎太六郎三郎船  
 頭弥六郎とあるふより。嶋困窮をとらえ。ま。十  
 二年の條。四月十八日。三浦より八郎次郎弥三郎  
 三艘。よて嶋へ入。十九日合戦。太郎次郎弥六郎三  
 郎船頭彦次郎討る。八郎次郎方。西村與次郎以

下四人戦死を五月より互に用心。早雲の代官圓  
 明十二艘。ふ。着。一艘。ハ國へ戻る。  
 八郎次郎とりの。奥山忠督のとおり。弥三郎ハ  
 三浦導寸の代官。三浦利重なり。  
 合戦かく扱み。ある。圓明年貢を岡郷ふ。請取六月  
 十五日歸國を代官八郎次郎船頭ハ嶋不殘し。三浦  
 の代官船頭弥三郎を生捕。國へ出。十九日。船頭  
 彌三郎を國。討首。ハ早雲へ上る。十三年圓明の  
 使船。三浦の左右を聞。六月十八日。國へ歸る  
 八郎次郎小嶋を城。ふ。らへる。大永二年。富士山  
 焼く。烟。ハ。あ。よ。は。國より。尋の船。ふ。歸帆

大隅評一統卷四



此時女二人國へ出敷同三年八郎次郎名成式部と  
 改むとあり又長戸路七郎左衛門尉真定の真隆の  
 子なり大永七年北條氏綱の命より兵士十五人  
 歩士二十人ふく八丈代官とあり渡りて七月  
 九日八丈ふて病死せしかばその子七郎次郎真純  
 を直に代官とささじ渡海し末吉村に家作りて  
 住し淺沼平次兵衛正知の女を妻とて男子三人  
 あり永祿七年氏康の命にて歸國をへりよ申來  
 りけふ如何なる事や六月十八日八丈ふて自  
 殺したると家譜に記せり然れハ早雲の領と  
 あり明應七年よりふりて朝比奈うらめて見

出きしよりあらむおぼり金川宗麟といふを誰や  
 いふみや武列神奈川に住き人と聞ゆ  
 長尾左衛門尉景仲武列神奈川邊を領したり入  
 道して俊叟昌賢宗麟大居士と云と長尾古系圖  
 みに記せり寶徳二年上野群馬郡白井に宗麟寺  
 を建立しけふ今ハ双林寺に改むなりハ  
 丈嶋を領したる宗麟ハこの長尾入道あらん  
 長尾景仲入道宗麟ハ次郎左衛門尉景守の嫡男  
 なり管領上杉安房守憲實の家老にて大小事を  
 べし景仲入道宗麟に決む永享八年信濃國の小  
 笠原と村上と確執し及ひける時鎌倉の持氏卿



ハ村上を援玉ムヘトて既ニ御旗を出されけ  
るト昌賢聞テ管領安房守ニ説ク是を諫めける  
ル信濃國々京都御分國ナリ小笠原ハ彼國の守  
護ナリ村上々在國人ナリ守護の進退を受以却  
クこれニ對捍モル工其罪かるから以是を助け  
玉ムント京都ヘ對一以の外の工と申上トて持  
氏卿怒テ管領を誅伐あるヘト思召立玉ヒ一  
我々永享亂の胚胎と云ヘ一持氏卿の自殺憲實の  
出奔結城の合戦永壽王丸を鎌倉ヨ還一入奉  
るまへ一此入道の意計又出たり永壽王丸元服一  
ク憲忠を誅一關東再度亂るク及ク一以入道の

奔走亦カアコトイムベ一寛正四年八月廿六日  
卒

板部岡越中守融成入道江雪の八丈へ渡リ一トテ  
伊豆國賀茂郡妻良の村田久兵衛門トハ平右衛門ト云  
者江雪ヨ從ヒ行一カ本國ヘ歸リ一のち八丈の工  
を詔ツテ々嶋戀一カハ一と涙おと一けるを見  
るもの聞の異一と云一丹波少將成經平判官  
康頼俊寛僧都鬼界三嶋へ流さむク三年を住日び  
一と云一いハ非モヤ夫ヨ其方ハ丈を戀一カふト  
いハム不審取リトカドレバイヤ我々ハ八丈を  
知ぬ故取リ彼嶋ハ女々家の主トカ一男ハをベ



入婿のふみ日本人を貴むらふ。我等の嶋の  
奉行たる江雪入道との。被官と云を以て嶋の長  
の取持みくその一族たる大家の婿となりたりや  
か。女房をともふ。色白くして玉の光りいさぎよ  
く髪長くして翠の艶らるる。顔やち世に類ひ  
かく手足のまのむやぎく。匂ひふるく美目とよ  
優あるのまら上品の絹をかさね着ておさ  
絹をたくまき帯をかき打見よ。天人かとあや  
しまれたる。あめいのみをまけの聲のどやら。花よ  
あ。鶯をかき形り。迦陵嚩伽とやら。聞ね。更  
子知よ。形。女御更衣といふ。い。は。く。是。ふ。は

増るへ手

一男を。太郎二男を。二郎三男を。さぶ。四  
男を。志やう。五男を。五郎六男を。六郎七男  
を。あ。あ。あ。八男を。八あやう。九男を。九郎  
といふ。長女を。ふよこ。次女を。ナカ。三女を。  
テゴ。四女を。クス。五女を。チイロアツバ。六女  
を。クウルウ。といふ。女を。ニヨゴ。又ハ。アツバ  
といふ。下女下男を。ヒツクワン。といふ。大を。  
ボウゲ。といひ。小を。ネツコイ。と云。速き。を。之  
アミ。と云。と。ぬ。絹の長さ。一よこ。とい。八尺。倍。  
四十筋あり。一尺。とい。八尺。倍。は。一よこ。を



鯨よて六丈四尺形なり。一端とりのり。四尺形なり。三  
 丈ニ尺まゝ一盃とりのり。京升の二合五勺も當  
 ぶ一升とりのり。一盃のり。十四なり。京升の三升  
 五合も當る其一盃とりのり。一度の食料より云  
 とふやあらん。甲斐國升も一盃とりのり。云  
 七合五勺なり。即二合五勺のり。三度分なり  
 我身を足れば色黒く骨太み髪縮む鬘いりて見  
 處ねいりね宿縁も此女と夫妻あり。小夜  
 の枕を交へ中とねつけるふやと氣も魂も身も漆  
 ぬまゝぞと夢や夢からは醒かん後の悔いさ  
 ら何あらん恨もいさゝと逢か何といとわのりと

今宵は思ひまゝ時よくり主の女房出來り  
 今宵は御婚入まてま嬉しと打笑ふ愛敬のま不  
 かく母の後まより添て物もぢりたる有様ハ  
 譬を取魚も縁もかくとかくまふ不どま。盃の數も  
 つりり主も娘も酔たれハ寢屋も入たふハ八段ハ  
 けの夜のゆの。後重とかく。志きかさね南柯の夢を  
 結ひ々かみ。鶏の聲も聞え東の空赤くふるま  
 不起出まハ。此家の一族の女立かりり。入かりり來  
 ませ。御婚入かりりけかりり。別して御國の殿さ  
 ませ。と禮義いさゝの土産を送りり。わくわく  
 と此國も見る聞かせぬとねり。おの天女の如



き女夜明さの縮糸をよりまぐらあれを染るま五  
月より七月まぐら三月九十日の間まがりやとを煎  
し三十七八遍染山茶の灰を灰汁みたく色を  
出せばいやくとたふ黄色とぬく又黒を染るま  
何時といふとぬく椎の木乃皮を煎して廿四五遍  
そめ染上りてきもの程を考へ田の泥み入る色は出  
はとなり棒色をば秋冬の間菌桂の皮みて三十遍  
まがりこれ洗染そのち山茶の灰汁まぐら色を出  
はとなりこまら乃業を疎みせは朝暮心を用ひ我  
塔君御歸國の御土産ま一端まぐら餘慶ま持ま  
を以て女の手柄ときふといへり

八丈嶋を伊豆國賀茂郡住人朝比奈六郎知明と  
いふ者見出し早雲へ申上げまより早雲大に  
悦ひ此嶋を見出したふ賞とま豆刈下田郷を知  
明と興まるといふ知明の子孫兵庫助と云まの  
下田を知行まると云ま是は上ま召えり圓明のま  
聞の長戸路七郎左衛門直敷まの子真隆まの子  
七郎左衛門真定まの子七郎次郎真純と四代相  
續まより七郎次郎永祿七年自殺せりのり板部  
岡ま渡まよりまより長戸路の家まてみ代官を  
停めら獲まよりまよりその子と母の氏淺沼を称  
しけふま真純十七代収蔵某ま時まいつま長戸



路も復したり

重修真書太閤記十一編卷之四終

重修真書太閤記十一編卷之五

北條家行儀の事

并福嶋伊賀守乃事

早雲入道元來伊勢伊勢守乃庶流たぶら故に將軍  
 家殿中の故實に練熟しつゆとひのひも及も以取  
 り豆相を合せ一萬四千二百五十町餘を領し正統  
 三十五萬六千二百五十餘石の藏入あは侍の負  
 千も餘は千餘人の侍みの組頭二十人小頭十人  
 侍大將五人を立る作法をれ侍大將の一人して  
 二百人を支配し小頭の百人を預り隊頭の五十人



を引廻さへし是は於て隊の兵士品の者隊頭も遇  
る途中の禮あり座上の禮あり殿中乃禮あり隊頭  
も遇て斯々といへり小頭より如何侍大将より何  
何主君より夫々と禮儀三百威儀三千こまの  
かみ途中と座上と殿中と三種の差別ありい  
や御禮の式も若君御曹司へ出仕の禮御裏御上へ  
伺公の禮一門衆へ參上の作法も後許の品々そ  
や若のやぐらに老人乃やぐらを聞ひ北條家  
ハ殿様上様若君様之れを御上通りと申はかや  
はくその次の御方様大方様さぐりの向々の御方々  
御連枝御曹司の品を知へし御所をハ屋形と申べ

くたとへり小田原御屋形早川の御屋形葦山様を  
ごり申さる

殿をのとの訓の火處主の義ありホド之のいへ  
きを上略してト之のいへヌレ云へる代下略  
て又之のいへ合せト又之かるあまひの處主お  
又といふ聞えされと老女をトジ之のいへを以  
るたのへハ猶火處主の上下略といふを善とを  
へし老女代トジと云トハ火處をうじハサキの  
約なり老女あまは火處栄の義ありトジといふ  
おろ猶熟思を教ふ人家より取て火處より貴を処  
あるへのら然して此火處の主といふハ家主



ありてこの火處を彌榮を榮をせむはふそのま  
 家主の妻あり。因て家主を火處主と云、其妻を處  
 榮といふあり。後又關白の妻を政所と云、大臣の  
 妻を御臺所といふ。同じく火處榮よりうひは  
 詞と知へし。政所の略語なり。臭みいそんみ政  
 事所と云へし。田舎あり。セイシ云云の臺所のこ  
 あり。又船あり。セイシ云々の飯焚處あり。ま  
 田舎の家あり。母屋は火處あり。是火處を家中の  
 主といふ所以なり。  
 其次は小田原の政事正しく。民をかづあそ後ま  
 一不どは近國他國の人民めぐま懐き家を移さ

津々浦々の商人まゝ西國北國よりむらばる來る  
 みよりむら。右大將頼朝公より。以來三代の將軍  
 北條九代執權の時といふと。是は争て増るへ  
 東の一色より。西の板橋に至りて。その間二千百  
 六十間見勢棚をかさう。暖簾をかけた。是は買入  
 の足を停めん不ど。日子照さ。風はあらん。心  
 心憂しと思ふより。かくの設けのからめ。山海の  
 珍物を異國船の載來る。平戸博多の津より。繁  
 昌。錦繡綾羅をちりめ。絹細縞紗のいろ。京の西  
 陣かへつ。寂寥たり。唐紙師藤兵衛。三十五貫文  
 の所領役をい。綱廣をちりめ。正廣と名乗。か



氏綱より一字を受て改めしとかや此時對馬守に  
任ぜしあり是天文八年の事といへり

正廣の正宗の末子なり長子藤三郎行光と云  
その次貞宗その次廣光その次廣正その次正廣

なりといふ貞治元年より明德二年まゝといへり  
二代正廣の應永の初あり三代五郎入道と云

四代永正の頃なりその次の正廣即綱廣なり  
その次は河越番匠といふものありその次は大工

三郎兵衛五郎三郎といふもの鎌倉からび玉繩に  
て知行を宛行されたりその次は太鋸引藤澤及ひ

豆列奈古谷もありその次は切葺といふもの屋根師

あり青貝師あり江間藤左衛門左右師孫四郎圖敬

齋縫誥神山奈良弥七黒沼いひは給地ありまゝ

石切三人豆列奈古屋み給地を渡さふ次は江戸  
鍛冶同番匠と云は淺草み知行を充行るまゝ銀

師八木といふものありまゝ小田原大判を吹しものと  
知らふ

小田原大判といふもの銀なり長五寸二分半弘三

寸三分弱上は永樂とあり次は菊次は桐その  
下は拾貫と記し永樂の字の左は相列といへり裏

み光春吉則と云字あり永樂十貫は金十兩の價  
なり天正十五年十二月十三日の買物帳は金五



夕七貫百五十文ありはとあり是金一匁の價一  
 貫四百三十文と知へしす々金四匁鳥目五貫六  
 百文ともしるる是ありは金一匁一貫四百文  
 ありは前の法より三十文界し金の位より  
 ありは金一兩六貫三百文とありは此六貫三百文  
 を二貫四百文みり割り四匁五分の金を一兩と  
 いふあり因て十貫文の金を考ふるは九七匁一  
 分四釐奇ありは然らば沙金七匁五分を永樂  
 銀大判一枚と易へ鳥目ありは十貫文即銀十兩  
 といふありはあらぬ  
 三嶋の紙漉鎌倉の結桶師笠木師經師いびしり知

行給なりこの時町の奉行を小泉といふこの小泉  
 うりへ京より外郎といふ人の來り種々の合藥  
 をうり中入り透頂香といふ靈藥あり長生不死の  
 藥ありとて氏綱へも奉る氏綱小泉より仰らば外  
 郎を城中へめさせその効能を聞たまふ唐土仙  
 家の秘藥なりけり外郎は先祖ありを傳へ大覺  
 禪師より從ひ日本へ渡りていと申より小田原に  
 り屋敷を賜り住居たり  
 京都將軍年中行事は正月七日外郎御藥獻上十  
 二月廿七日外郎トウチン香五包と見え又國花  
 万葉記山城の部は京都西洞院錦小路下ル町に



二位杏林外郎透眞香とあり

氏康武勇の大将たふとの世周くこれを知とゆ文  
林もまゝ尋常は勝むとを知らぬの寡し或時氏康  
高樓の上より涼く居たまふその折し庭の木立の  
かげよあさる孤かろくと鳴て過たりをばと氏康  
とありあさる

夏はそよ寝よかく蝉のから衣己くう身の上よ  
と詠したまひそのまゝ盃とつて終夜酒ありし玉  
ひしとあり曉うへは時を告るもの見廻りける序  
築山の蔭に孤の死し居たまふを見付て申出しとね  
り又武藏野より出陣し玉ひけか時柳嶋といふ処の

松の根み旗おし立たぬひく

旗たてし昔を松り知らぬや風は靡ぬ草も木もか  
と詠しあひしとかやこれを見あらひく松田孫太  
郎佐藤四郎兵衛高橋将監笠原能登守鈴木兵庫助  
かと詩歌よ心を掛京都より和歌の達者を招請し  
合戦の間しよこれを見あらひく曾我の里劔澤  
の藤見よまかりく横井勘助時同

瀧水よりゆらみ影もまろ行松よあさるて咲る藤浪

朝倉右京進元能  
袖ふけ春やあさるの花の香も忘るる咲る藤浪  
松田孫太郎元秀



浪ちぬ御代の春をや惜らん松よのまは藤の花房

佐藤四郎兵衛清長

藤の花むらゝを問ひ紫のゆゑの色々深めてぞさ

高橋将監照元

藤の花おの山里に誰をか心しとや待てはきん

笠原能登守鈴木兵庫助を此花見又けりとはおと

ありて漏れかは能登守

おゆふとち花乃花をを深めてや藤咲里に袖を連ぬ

兵庫助の雨をおりてまゝの日は態と見ゆ行て

諸とゆみ問ひぬ吾は藤の花恨むる雨のありまを教ふ

と詠けりかや又嶋津長徳軒成田下總守の連

歌を好きて花の下の宗匠呼下り又ハ月次の詠

草を京進きりとも有となり難波田與太郎春日兵

庫助吉田新六郎中條出羽守ハ數寄者まゝ月の夕

雪の晨朝あまひハ水鶏のおくころ郭公のけり入

時ハからびよびかき思ひを暢ける中よも嶋

津長徳軒と武藏國豊嶋郡千束の郷に知すゝて

住たりけるも我こそ偶田川の入江かけける処み

く蘆葦まこりかど生あげり物けりしを処かお

み浅草寺の近けしは思ひの外に人あり銀糸く松を

懸りて翠の瓦おとよおゆり由出仕の度よ

かゝりけるみより氏康朝臣隱居の後觀世音參詣



の序入立寄玉ひけるに長徳軒を小鷹狩み出ると  
 らあらはく内へくもねをのぞくと氏康朝臣押  
 て入たより庭の内かと思廻り給ふより大なる  
 池ありその池に柴橋いと危ふけし打渡りたり渡  
 り見給へ少し高き処あり上るみはけし隅田  
 の川舟ありくく思ふに登りては  
 櫻楓なるとはせをまぐり植てその林を出せし廣  
 ひろくたふ野邊に蘆葦かと青々と志ざりたり  
 中は草葺の廬ありて主をえんば如何なる人の隠  
 れ家とさしをくく釜のたぎ音まよと松風よ  
 かよひく心もまむくやをら障子を引あけ入て

見教よめの古し様々の調度引あらたり釜の下  
 入茶椀茶入茶筌ふくべの霰かどまぐり有へし様  
 形り氏康朝臣爐の下に坐してづら一服點して  
 飲ととはあら主人長徳軒歸り來り嚴く敬命し  
 主設とんと小綾のいそをあるを氏康朝臣より止  
 め今宵の月を愛むやと宣ふより然るべしとて  
 その用意し池の舟に棹さし藻の花をかきわけつ  
 ゆけがいにし川入出たり此川秩父郡の山奥よ  
 り流せ出るなり盃を浮ゆるをかりゆ々やうか  
 れと横見入間の郡を流せ足立豊嶋の堺よいとて  
 ハ船からでる渉るべき様かきまぐり廣く深めた



ぶら此わくろみくわ川の廣さ七八十尋みおよび  
 たり船川の正中みいゝは塙月をてゝ東の梢に昇  
 里一かは金の浪あともかり謀まされたり長徳軒  
 盃とりて此夜の會まれあふへ一此處に此會ま  
 稀あるへ一御着もかかと打つてふく時は川下よ  
 り來り船あり船頭をかくと見知たふみや棹を止  
 めて進まぬを長徳軒遙に見付やよその船も何の  
 船ぞ釣船の漁船と問へ三尺の鯉はり得てはと  
 答ふそそふしと思ふ処おろいでいと云ひくその  
 鯉とりて膾とかり汁とす瓢の酒を汲かき一鐘  
 深くあふまふ二月ハおもひ澄わたり遠かりは鐘

の聲聞ゆるそ指折りのみとは既に曉ちかゝ然  
 へとく本の水路を漕めくら一芦の一村志げとほ  
 中と棹さしゆいゝ不どもぬく長徳軒の庭の面に出  
 たりかよみの遊ひまゝ有まると供ある人々實に  
 仙境に入るかと思ふと故人乃いひけるを如此境  
 のとあるべしと人とか語り傳へたりはりか  
 かくの如く風流のこころを教ふあらは又正月七  
 日射初の式鈴木大学頭をそめ能射の面々参向  
 一大将の御前入於る五度十度の作法をべし兼倉  
 將軍の故實を傳へ八日の鉄砲始りまゝ犬の馬  
 場といひの長五十間を横三十間を構えらば射手



ハ鳥帽子直垂馬より犬ハ二十足三十足矢壺を  
 吟味し矢數を争入島津家の藝流れ久々傳へ  
 せりこれハ武士の専門ありさの名譽といふべ  
 ろし以て殿役者より今春源七保生新九衛門大鼓の  
 三谷大藏仁助威徳三郎四郎小鼓ハ美濃意樂官増  
 弥右衛門今春權助大鼓ハ奈良新八五野井笛ハ彦  
 兵衛助三郎狂言ハ鷲大夫こも等ハ小田原子家造  
 として藝を施しはく又佐藤ハ大鼓ハ山室ハ小  
 めが之霞齋ハ大鼓三浦ハ住し業を流しハ嶋屋  
 父子ハ八王寺ハ宿をりめハ列を廻りて勸進能  
 をなし淡谷ハ品川ハ住して謠をおしえ暮松大夫

ハ江戸ハ住て神田明神の神事能を勤む是ハ明神  
 の託宣より毎年九月十六日ハ執行せし大永  
 四年正月十三日江戸の城主上杉修理大夫朝興北  
 條氏綱ハ攻落さし川越へ引退さしハ本丸ハ  
 畠永四郎左衛門二丸ハ遠山四郎兵衛香月亭ハ太  
 田源六兄弟を置きたり然るもその年の合戦の最  
 中といひ殊ハ九月ハ所々の軍ハ暇なく同五年ハ  
 奮劔の如く神事能と暮松大夫ハ仰付ら終り是  
 を例として隔年ハ執行しつゝなりたり  
 大永五年ハ乙酉あり今に至りて神田の神事酉  
 亥丑卯巳未の年ハ行ふと終り然しハ大永五年

大正言上巻五



より三百三十五年相續なり

是みはぐさく小田原の繁はら花あると日みやう一月々  
 み盛さかかりしか諸侍の衣裳いさう着より上下小袖の品々  
 まぐ小田原様とめくさやう一殊ひとは男をとこは鉄漿てつじやうを舎こ  
 老若ろうじやくともみ齒はの黒くろき侍さむらいありと賞しょう翫くわんをふとみか  
 更さらはればいらみやめして忍しのみとも在ある郷人きやうじんとも是  
 成なりれば馬うまより下くだる敬けい屈くつをそのこり伊勢いせ備中守びちゆうのしゅ  
 山前やまのへ紀伊守きののしゅ福嶋伊賀守ふくしまのいげのしゅと三人の武者むしや奉行ぶぎやうあり  
 備中守びちゆうのしゅの堅固けんこの良将りやうしやうみして智略ちりやくをくまたりかり  
 そめのとまぐ心こころを深ふかく用もちひききは聊いささ尔なりも楚そ忽とつ  
 か山前やまのへ紀伊守きののしゅの元來げんらい武勇ぶゆうのまくとくはより心

も剛たけなも氣いきも猛もうはははれはあれは子こ從したがふ若殿原わかにんげんいつれ  
 り武邊ぶへんをたふめバ髪かみを洗あらひく名香なかう成なり焚たきし朝  
 夕あす行ゆ水みづしき身みを清きよめ死ししてのちの美名みなをぬがひ  
 生なて更さらは榮耀えいごうをいよ福嶋伊賀守ふくしまのいげのしゅの手のもの  
 とくハ弓矢ゆみやの取様とりさま甲冑かうきゆうの作つくりまぐ心こころをぬめて用もち  
 意いをよは太刀たちも刀やいばも尋常じんじやうは越こへま軍法ぐんぽうは鍛練たんれん  
 したまハ我われ寄子よこハ云いふ及および組ぐみのわのまぐ一様  
 み髭ひげの作りつくりも髪かみのたをぬ殊ことは目めまたあ出立いでだてたり



重修真書太閤記十一編卷之五終

重修真書太閤記十一編卷之六

北條家臣智者仁者勇者乃事

并寡婦鰥男訴詔の事

福嶋伊賀守とくれば大男ふして鬚黒く勢高  
 し出仕の装束長柄の刀は腕貫うらてきとせり  
 有り短刀の柄を赤糸にて巻時り有り虎の皮の尻  
 鞆を時り有り然まとも勝れり武邊覺のみの  
 かれハ上みゆこれに答め玉より傍輩も更は是を  
 怪敷といふ一年小田原久野宮の祭の日諸待大  
 将物頭衆いめし見物入出たり伊賀守も見物



をぢやとして牛の角に金箔を、茜の大總鞆に茜  
の手綱を付けてその身の腰に鎌をさし、後向に牛の  
けり草刈の躰にやのし尺八を吹十七八と足踏る  
若く清げある女に紅の帷子にせ拮校笠として先の  
どがりたふ笠をかみりて牛の張綱をとらせ十二  
三の力者み長刀かくけさせを祭の跡に付て見物  
たり

拮校笠との紙を以て造り富士形よりたふを十  
二に帖きて端を折返せば拮校の花の如く反て  
足ゆるより然名はけたる寛永の末まづも此笠  
流行せしと云ふ頃繪に往々見ゆるなり

かやうに異躰の風流をなして伊賀守と伊勢備  
中守山前紀伊守を旗本乃武者奉行三人と奔走  
せし不どおとは誰ありし是を答むるものなり  
こと自然小田原の亡ふべき瑞相と後よりおのひ  
合されたりはとともこの伊賀守まとい尋常の人  
み及超りけりある年相列馬入の川まゝ鶉を遣  
みとの小田原へ参上し近き程より此川に異様の  
その出来し人を取りよより漁獵かせざるの難  
儀仕る由を訴ふ伊賀守聞てその様あるものも稼  
を妨げられしと云ふ斐かかれいゝ伊賀守退  
浴して取をへきありと云ふ中間一人百連馬入の



たうろく、鷄をばつり、然るも何とぞ仕たりけん、誤て  
中間水中へ落入ちりしや、時を移せとも、浮き  
出以、伊賀守まへ癡ものよ、遁まよるとて、腰差の刀  
を下帯みさし、水中に入て、これの何とも知ぬもの  
有り、眼の光、まはれまよる、伊賀守の中間を喰  
ふ、伊賀守刀、抜て走つ、彼ものを、弓手の腰に  
引かへ、連け、五刀は、少く弱くて、見え  
けるを、猶後刀、さへ不ぞみ、川水紅まありて、浮こ  
上あ、と何あるものぞと、能見せば、長七尺許、か、鱸  
なり、このや、但し中間の終、死たりと、おろし是等  
も、非常の怪事といふへし、好事、無しの如く、とい

つり、知や、か、怪異、な、於て、おや  
鱸古事記、入、須受岐とあり、出雲風土記、万葉よも  
この大なるもの、三四尺、み、つ、か  
又伊豆國、加納村の地頭、清水太郎左衛門、康秀と云  
ものあり、後、み、上野介といひ、關東無雙の、大力あ  
り、その妻、ま、夫、よ、劣らぬ、力ありと、世、よ、許、せ、れ、つ  
也、とも、いくら、許、の、力、といひ、こ、を、知、る、の、か、然、る  
も、宿願の、と、ありて、妻、女、加納の、山上、氏神の、社、へ、参  
詣、し、け、か、途、中、の、坂、み、穀物、二、俵、付、た、る、牛、の、伏  
居、た、る、を、見、は、け、い、ろ、あ、る、と、み、や、と、は、し、の、ぞ、く、み  
跡、足、二、の、谷、へ、ふ、と、落、し、ひ、る、が、岩、角、よ、俵、の、つ、く

大問已二編卷六

三



留りるなり荷繩を切の牛谷底へ落て忽ち死すへ  
然とて引上へき様かお色の牛主あきれ惑ひく  
居たる体勿々いんやうもなす清水の妻あせを  
てあそれこの情を起し助けて見むやと思ひけ  
は當りの人を除け只一人傍へより俵と牛の領  
とを中より引のりて引上たりしかば牛助めりて  
荷主歡入と限りか二俵の穀物の三十五六貫は  
過されと牛の百貫目も餘るへ是を中より引上り  
と更に入間の業とおわれはと沙汰しけり此女  
の腹は男子あり正次といふ太郎左衛門尉の名を  
はぎ駿河國長久保の城主たり後より是も上野介

といふ數度の合戦は高名を顯し大力無雙の勇  
士とせよかくれを甲斐の大黒といふ谷馬を持  
たり此馬一日は大豆一斗を食ふ尋常の人乗あま  
からん厩の出入り中間六七人して綱を附て出  
以然るも太郎左衛門尉此馬は打のり進退曲節自  
由を盡し馬場のり堅場に至り聊も意は従らぬこ  
いふと朝に駿東郡長久保を發しあみしを小  
箱根を升下り小田原に參着し公私の用をくつへ  
暮は長久保よかへる此道廿餘里日を重ねて更  
疲しし体なり太郎左衛門尉ふくくこれを愛し  
いくく乗けふがいらふ氣性の轉しやあふ日

大岡巳上編卷六





太郎左衛門尉乗とそのお、馳出、けふを、手綱を  
 以て、何ら、らみといへども、更、止ら、次、まき、引、か  
 け、い、か、ハ、太郎左衛門尉、跨、み、一、め、急、度、志、め  
 付、多、と、ば、立、処、み、血、を、吐、く、死、し、た、り、け、り、又、佐、竹、と  
 對、陣、あ、ま、け、る、時、太郎左衛門尉、黒、絲、威、の、鎧、ハ、八、幅  
 四、方、の、大、ぎ、一、の、み、岩、手、月、毛、と、い、ふ、馬、の、り、一  
 丈、お、ま、り、乃、檜、の、棒、伐、八、前、み、削、り、鉄、の、筋、金、入、た、お  
 を、以、て、敵、の、中、へ、割、て、入、り、手、馬、手、み、打、拂、ひ、當、る、を  
 幸、ひ、叩、き、た、く、し、不、ど、よ、一、拂、み、五、人、十、人、泣、く、う、ち  
 心、し、ぎ、い、か、バ、佐、竹、勢、忽、々、打、崩、さ、れ、し、と、い、く、り、清  
 水、持、一、檜、の、棒、ハ、む、う、上、杉、憲、政、の、住、宅、ア、上

列、平、井、ハ、氏、康、の、押、寄、た、ま、し、時、上、杉、方、よ、り、荒、井、傳  
 八、と、名、乗、て、ふ、し、繩、目、の、鎧、を、着、し、黄、瓦、毛、の、馬、を、打  
 の、り、徑、一、尺、を、り、形、る、大、鉞、を、以、て、片、手、打、み、打、た  
 て、し、か、ハ、北、條、方、多、く、甲、の、真、甲、馬、の、平、首、お、と、処、を  
 嫌、々、ハ、切、ら、ら、し、薙、立、し、不、ど、よ、氏、康、の、旗、本、を、で、み  
 崩、立、し、と、せ、し、時、福、嶋、伊、賀、守、の、檜、の、棒、を、以、て  
 傳、ハ、み、ら、し、又、向、ひ、討、ひ、ら、し、上、段、下、段、半、時、あ  
 ま、り、戦、ひ、し、か、と、ら、勝、負、更、み、付、ば、伊、賀、守、ハ、大、力、の  
 早、業、あ、れ、バ、棒、を、さ、し、の、へ、馬、も、人、も、只、一、打、と、ら、ち  
 け、ふ、を、傳、ハ、碯、と、受、留、し、か、ハ、伊、賀、守、傳、ハ、持、た、る  
 鉞、の、柄、を、奪、ひ、と、ら、し、と、拈、合、け、る、有、様、あ、ま、お、と、よ

六、司、已、上、編、卷、六

五



大隅言二終卷六  
三  
金剛力士の如くおろ互人み知もたる勇士かれ  
ハ一交りきび引合けるが終も真中より捻切鉞の  
刃ハ伊賀守の手みこり柄を傳八の手は遺りた  
まはとども伊賀守ハ片手は棒を取へたは取  
直して撃んせし如く横井越前守荒井馬を射た  
まけふみより傳八をみて討れたるおろ軍  
んじてのち伊賀守此棒を清水へ許へ持参し其  
此棒を投ぐべきめの御邊よりあるべうらんと  
て譲り如とかや本の主ハ鬼神を欺き福嶋伊  
賀守おろ如々の合戦みいひり此棒みく手柄を顯  
るる一と擧てかぞへら氏政氏直兩大將こ

の清水り力成志らむやと思われ技のこころハ寸  
餘の鹿の前二の投出しこを以て興あか様は振  
舞へやといふれけふより太郎左衛門尉前二の  
を一の握こひいと握こハと砕けしを九  
右ハ引裂たり兩大將をとりめ満座の諸士の頭  
何事も舌を振ふるこれ成感トたり又北條家は一  
本傘二本傘といひらや或時房列の海賊船  
五六艘小田原の浦手へ寄来りとして町中の上下  
騒ぎ立取ものも取あえ以濱手へ走出けふらあま  
二本傘のさしやのたふ侍一陣又進み大音聲  
み名乗る様是ハ相摸國の住人高山大膳なりをや



舟漕よきく勝負を決せよとをめぐりたぐべとのへ  
ども更なるの船みきよせんともせし折ふく小雨  
降出しかの誓願寺の庭林といふ僧からかきけし  
足駄くき見物衆まきせ居たり々々が高山の名  
乗をきいて興あふとまおりの同しく打並て大音  
阿げ一本傘の法師武者を如何かおとの思ふぞ  
やかくドけなくも浄土宗の大知識誓願寺庭林大  
和尚との我事なる敵み取てき不足あらうと漕  
寄よとせし指けの海賊船みて是を聞けし小田原  
乃庭林和尚との聞及ひし知識のつはきとも漁獵  
のためみ出たるみ風のおりてあつ追よきか

とば法談聞てり布施の用意かしく漕返し重ね  
て参詣をへちたりといふより早く我おとらうと  
漕返を是をらう高山といふ馬を浪打際よかけ  
と衣返せしと呼びよといへとも元より軍船よあ  
らぬ漕はし海原の雲井遠くかくれぬりけく  
こそ一本傘二本傘の噂高く聞えりなり又三浦  
三崎の浦へ南京船漂着しけり三浦の奉行安  
藤豊前守これを小田原に注進しけり氏政朝臣の  
下知として載来る処の綾羅錦練をくらめ種々乃  
焼物沈水香奇南麝香の臙珊瑠璃車棗馬腦以  
下その數をびたぐりといへとも關東富貴みりて

六月廿二編末六



四五日のうちみ是を買取けふより船主も思ひ  
 のりふ利分々得たり舶來の唐人當地に留まり  
 て家業を営まんと願ふのみを小田原より屋敷  
 を與えぬのみより未代かけて南京落雁南京おみ  
 しどりの菓子も出來唐線香唐木綿すゝの唐紙  
 唐織おみなり唐といひ唐といふ物の名を此時よ  
 りぞとどまりぬすゝその順朝比奈弥太郎とて元  
 ハ駿河國ののりなりけふり今ハ小田原に在り武  
 勇ハ世に許されぬの形はり小田原より濱松へ  
 使ふはくとも日暮日金を越せけりいとゞその  
 ことごと日金堂木下暗く寂寥きよ向せらればそ乃

長六尺の男かといふれハ髪ふりくくハ白銀の  
 針み似たり法師かとおもへハ三衣をも着き色黒  
 くして眼ぞ尋常ならぬが松明取て立ち彌太  
 郎心中ハ日金山ハ地獄ありと聞けりけりけり  
 言ふてハかゝりけり此のわら一定獄卒あるべ  
 然もくも我戰場みて人の殺しはせとも我心より  
 傷みあらば合戦の場より太刀物具を多捕せ  
 とハあせとも人の門戸を破りて木の實一の取  
 出とぬ地獄の因果を受べき應報ありと心問  
 ひ心決し進みけり彼者彌太郎ハ向ひ申ける  
 様憚多き申条なせとも下りやぐより若き女より



此へ一急ぎにへ上り待りのありと御傳を給ひへ  
 と申し彌太郎不思議に思ひおぼら心得法ふよ  
 答うらちをぐとば果して十六七をかりの女暗を  
 道やたどけし上るに逢たり彌太郎其女よむひ  
 云々と言べ辱かきよし申て上り行けふに九かの  
 怪物と行逢ゆらんとおりの時大みさあふ聲聞え  
 まる物をうち倒を音志きりありけふを何事かり  
 やと怪しめと引返し見届しゆ奈何とおりのひかり  
 麓へ下るふ玉澤とのひ処ふ箱根の關守半田某  
 といひのりぬ女十七歳ふて死したふを葬るふ逢  
 たり朝比奈正直第一の男おとば只今日金ふて逢

ちかひ此關守半田の女の幽霊あるへ父關守  
 て非常の事ありふよりその女地獄に落しと覺  
 こころあふ哀れさけ入聲乃聞えの彼獄卒の打  
 し楚の痛さをいかしうかるへ打倒されし音  
 長獄卒責らゆらんと朝比奈と語りて朝比奈彌  
 のの信とて彼是に傳えしとて朝比奈彌  
 太郎鬼に逢しとて又の幽霊をえしとて沙汰し  
 めふとなつ後み能々尋せの怪物と見たりといひ  
 金の地藏堂守の僧みくそれ女麓の里に住け  
 るが今宵しる父の法師のりて歸り來るを父の  
 法師うむひみ出ひふりその女山路みく山犬



小出逢一は叫ひけふ処へ法師來つて山犬を打  
 殺しゆるなり朝比奈さる勇士形ととも思慮たり  
 以かやうの浮説を云ふらざとて口惜きと形ら  
 まや小田原北條家の外ハ榛原弁と云榛原とハ伊  
 豆國葦山ハ早雲入道の居給ひあり弁作アハ  
 あり京弁よりまこ一太形ふめのなり安藤豊前守  
 是を奉行き一ハ安藤弁ともし  
 今按ハ安藤弁と云ハ安東弁の轉き一あり安東  
 弁とハハハ伊勢の安東郡なり太神宮領の弁ハ  
 一ハ即令前弁あり曲尺六寸四方深二寸五分積  
 九十寸あり今京弁ハ一弁三合九勺余入

天正十二年十二月伊奈弥右衛門とハハハの此弁  
 の質を作り一罪より小田原芦子川原にて磔  
 かけら流さる都て此條家の政事淳直入して質朴  
 あり伊勢備中守大和兵部少輔小笠原播磨守松田  
 尾張守同肥後守山前上野介同紀伊守芳賀伯耆守  
 安藤備前守板部岡江雪入道十人を奉行とハ公事  
 訴訟をへ十人して是非を決断を或日上列吉井  
 と云里の百姓捧み頭を打割れ血を流したるが  
 詭人なり相手及寡女あり男詭て云我ハ妻あり彼  
 夫あり日頃密通しハ処女我を嫌ハ外の男を迎  
 入我を盗人と云てかくの如く疵を受ハ無實申掛



此男と密通せしとね！夜我家の戸を破りしは  
 盗人と申てはとりし。雙方實りし。神色變ぜ  
 以十人の衆も決しかねし。時江雪いし。訴訟  
 ともし。理聞えし。共證據か。何そ證據を出し  
 へと責し。かは女志。打案。取し。か。り。我身  
 夫は別れし。日より。陰處。聞草。といし。腫物出來て  
 殊のり。痛し。は。我。色。托。へ。男女の道おひよりし。  
 此男と密會せし。おとね。といし。男いし。女の身  
 入腫物あれども。交合の障。あ。ら。し。といし。その  
 時女は。り。と。笑ひ。我身。入腫物。か。然とも。證據と  
 されし。となり

いと。驚。み。より。態。と。虚言。をか。ま。へ。し。い。といし。男  
 大に驚。忽。み。色。を。變。因。て。男。盜。人。み。決。せ。ら。し。  
 繩。を。か。け。獄。に。送。り。し。女。の。理。運。し。て。家。か。へ  
 されし。となり

野山の末こと

秋の夕暮

大正十一年四月



人の心に幾多の縁の

志はあがきあきらむる

ふれにむすむ

かゝるもの物とのまゝ

はふあかりに

ちほせまをり

重修真書太閤記十一編卷六終

かき霜のまじりたるもの

心はあきらむる

志はあきらむる



